

関係各位

日本ボート協会 2020 特別委員 兼 審判委員会スタッフ
中島 大祐

【大会参加報告】2018 World Rowing Cup I (Belgrade, Serbia) 2018/6/1~3

1. はじめに

- (1) 2018年6月1日(金)~3日(日)にセルビア共和国 Belgrade、Ada Ciganlija で開催された FISA 主催の World Rowing Cup I (以下「WC-1」)に ITO (Jury=国際審判員)として参加させて頂いた。(航空運賃(定額支給)及び滞在中の諸経費(国内交通、宿泊、食事等)は現地組織委員会(以下、OC)又は FISA の負担。)
- (2) 私自身、2016WC-1、2017WRU23CH に次ぐ、3 回目の FISA 大会での審判業務であった。
- (3) 審判業務を行う傍ら、審判業務がない時間を利用して 2019 世界ジュニア選手権 (2019WRJCH) 及び 2020 オリンピック・パラリンピック (2020Games) の東京での運営に有用な情報を FISA 及び OC から収集した。本報告書は審判業務の報告に加え、大会運営全般に関する報告も行う。
- (4) 本大会には FISA 審判員の山崎佳奈子審判員が NTO として参加した。日本人が日本以外で行われる大会の NTO 業務に就くのは初めて。NTO の業務については山崎審判員の報告書を参照頂きたい。

2. 総括 「FISA 大会の運営上の要点(日ボ大会との比較において)」

詳細の報告の前に「FISA 大会の運営上の要点」について記載する。2019 年の世界ジュニア、2020 年のオリンピック・パラリンピックにおいて、FISA 主催大会で初めて NTO やボランティアを務める方も多いと思うので是非参考にして頂きたいと思う。

(1) ITO と NTO の職務分担

次の通り ITO と NTO (更にはボランティア)の間には明確な職務分担がある。ITO のみが与えられている責務・権限がある一方で、ITO だけではこなし切れない業務を NTO/ボランティアに分担してもらうという仕組みになっている。日ボ大会では班長が班員に権限委譲することがあるが、FISA 大会ではその部署における総合的な指揮・判断・決裁は全て ITO が行う。

① 線審

Aligner (NTO) が艇揃えの業務を担い、Judge at the Start (ITO) が艇が揃ったことの判断(及び False Start の判断)を行う。同一人物が艇揃えの業務と艇が揃ったことの判断を行うのと比べると、牽制が強化されることにも繋がる。

② 判定(この項目のみ ITO 2 名の職務分担について)

レースを目視していない Responsible Judge at the Finish が Photo Finish に基づき着順を決定するのが「主」であり、決勝線上に座る Judge at the Finish が目視に基づきバウナンバーを通過順に叫び、その数字を NTO がテンキーで入力するのは「副」である。バックアップとしての「副」が採用されるのは、「主」に機械的な不具合等があった場合のみであり、Photo Finish の結果よりも人間の目の方が正しい、という論理は持ち出されない。

③ 出艇監視

バウナンバー・GPS の装着、Photo Book との照合、広告違反がないことの確認、安全装備の確認等を ITO/NTO/ボランティアが業務分担して短時間で行うが、最終的に「合格」の判断を下すのは ITO のみである。

④ 帰艇監視→艇計量

艇計量対象クルーへの指示は ITO 自らが行う。どのクルーが艇計量の対象クルーかという情報は最小限の人間（審判長、Representative of CC、In Pontoon 担当 ITO、艇計量担当 ITO）にしか事前に知らせてはならない。しかもその方法は担当者間の口頭による直接伝達か、紙で情報交換することになっており、無線・電話を使用してはならないことになっている。これは事前の情報漏洩により当該クルーによる不正の誘発を防ぐ為である。NTO によっては（自分達の業務の負担を減らしたいが為に）艇計量対象クルーを事前に纏めて教えてほしい、と言ってくる場合があるが、これに対して ITO は No と言わなければならない。

(2) 大会日程の変更

最終日、落雷予想に基づくレーススケジュールの変更があった。落雷発生予想時刻にレースを行わないようにしたことは勿論のこと、当初「Final B→Final A」だったスケジュールを「Final A→Final B」に変更し、落雷が多少早まっても Final A に影響が出ないように配慮（危機管理）をした。その日の最終レース（Final B の最終レース）が終了した数分後から雷が鳴り始めたので良かったが、もし Final B のレース中に雷が鳴り始めていたら、その後のレースは行われていなかったかもしれない。

(3) 表彰式の進行と発艇定刻の変更

Final A は連続して行われるが、レースが終了すると直ちに表彰式が始まり、表彰式が終わると直ちに次のレースがスタート、そして Tower Announcer がこれらを絶妙に繋いでいる。表彰式の現場では Technical Delegate (TD) が無線で審判長と連絡を取り合いながら細かなタイムマネジメントを行っており、時間内に収まらない場合には発艇定刻を遅らせる等の判断を躊躇なく行っている。今回、Final A の最後の 2 レースは定刻を 2 分間繰り下げる判断が行われたが、これもタイムマネジメントの結果である。次に述べるスポーツプレゼンテーションを含め、ボートの魅力を観客や視聴者に最大限に伝えようという強い意志を感じる部分である。

(4) スポーツプレゼンテーション

判定塔の見通しの良い場所に Tower Announcer が 2 名、2 台の Commentator 車に Commentator が 2 名ずつというのが Sport Presentation の基本形である。（Commentator 車が 2 台あるのは、交互にレースを進行する為、1 ポジションに 2 名ずついるのは英語と現地語の話し手を用意する為。）観客席の観客は 1500m くらいまでは大型ディスプレイの映像と彼らの場内放送でしかレース経過を知ることができない為、ボートの面白さ、魅力を伝えられるかどうかは偏に彼らの喋りにかかっている。日本でもいよいよ 2019/2020 年の 3 大会で本格的な Sport Presentation を実施することになるが、喋りの専門家を養成し、日本にも Sport Presentation の文化を根付かせたい。

3. 大会概要

(1) 日程

5 月 31 日（木）＜大会前日＞ Spare Race、Practice Start、TMM & Draw

6 月 1 日（金）＜大会 1 日目＞ Test Race、Heat、Repechage、Quarterfinal

6 月 2 日（土）＜大会 2 日目＞ Repechage、Semifinal、Final A-F

6 月 3 日（日）＜大会 3 日目＞ Final A-B

(2) 競技会場

セルビア共和国の首都 Belgrade（旧ユーゴスラビアの首都でもあった）市内にあり街の中心部から北西約 5km にある Ada Ciganlija にあるコース。Sava 川の支流を堰き止めて作られた人工コースで Sava 湖とも呼ばれ、市民には遊泳や日光浴等、レジャーの場所となっておりレース中も水着姿の市民や観光客が岸辺に多く見られた。

(3) コース概要

コースは東西に長く、スタートが西側、フィニッシュが東側、判定塔を含む陸上施設は北側にあり、レーンは判定塔対岸（＝スターターから見て右側）から 0→7 レーンとなっている。（0レーンの外側に回漕レーンが2レーンある。）

FISA ルールの細則 42-44 条には「1レーンは発艇から見て左側が原則だが、テレビ放映がある場合、テレビ画面の上方が1レーンになるようにする」とあり、このコースはそれに該当する。ウォーミングアップ水域はスタート後方に設けられているので問題ないが、クーリングダウン水域は回漕レーンを上り、0～1レーンを下る為（戸田と似た運用）、マーシャルによるクルーのコントロールが危険回避に重要であった。

(4) 種目

WC Eventsとして競技を行うのはオリンピック 14 種目のみ。非オリンピック 6 種目（全て軽量級種目、実際にエントリーがあったのは3種目）は International Events、パラ 4 種目（内 PR1 男女 2 種目はパラリンピック種目）は Para-Rowing Events とし、3 イベント（全 20 種目）を共催の形式で実施。

(5) 大会規模

41ヶ国から 267 クルー、593 人（コーチ等を含むチーム関係者は 900 人程度と予想）がエントリー。この内、純粋な World Cup へのエントリーは 214 クルー、532 人だった。

4. 審判（生活面）

(1) 宿泊・移動

ITO のホテルは会場まで徒歩 20 分の閑静な住宅街にあった。居室に問題はなかったが古いホテルでエレベーターが手動の開き戸なのには驚いた。会場との往復には OC がバスを手配していたが、歩いて移動する審判もいた。（私は夕方の FISA や OC との打ち合わせが長引き、歩いて戻ることが多かった。）

(2) 朝食・夕食

レストランでの朝食と夕食は味、選択肢、スペースの広さ等、非常に満足のいく内容であった。レストラン以外にロビーのソファで 10 人くらい談笑できるスペースがあり、ITO 同士や FISA 役員と夕食後にコミュニケーションを取るには格好の場所であった。

(3) 昼食

会場の選手ダイニングで食事を摂った。大会初日に POJ からミールクーポンが日数分配布された。今大会では Drink Coupon（1日2杯分）も配布され、コーヒーを飲むのに重宝した。

(4) 公式イベント

大会2日目の夜に Nations Dinner が行われた。Jury が参加する公式イベントはこの1件のみ。大会1日目の夜に現地 NTO 中心メンバー主催による ITO/NTO 合同の非公式 Dinner が行われた。Patrick 審判委員長も参加したが和気藹々とした雰囲気で大変思い出に残るイベントであった。

(5) 移動バス

第1日 07:20 ホテル発、07:45 審判打合せ（09:30 第1レース発艇）

18:05 最終発艇、19:00 会場発→ホテル

第2日 07:20 ホテル発、07:45 審判打合せ（09:00 第1レース発艇）

（選手計量の中島のみ 06:45 ホテル発、07:05 計量開始）

16:29 最終発艇、18:00 会場発→ホテル、19:15 ホテル発→Nations Dinner

第3日 07:20 ホテル発、07:45 審判打合せ（09:00 第1レース発艇）

5. 審判（業務面）

(1) 担当部署

以下部署を担当した。

第1日 午前 09:30-14:15 (53 races) : Control Commission In-pontoon

午後 15:45-18:05 (29 races) : Umpire-5

第2日 午前 09:00-13:22 (47 races) : Athlete Weighing

11:05 頃から Control Commission Out-pontoon

(更に 13:10 頃から Sport Presentation 見学)

午後 15:00-16:29 (8 races) : Umpire-4

第3日 午前 09:00-12:31 (25 races) : Judge at the Finish

(2) Starter（発艇）（今回は担当せず）

今回は発艇合図信号（光発艇）を使用し、自動発艇装置は使用しなかった。呼び込みは（Assistant Starter ではなく）Starter がマイクロホンをういて行う。2分前になったことを知らせる為の黄色い回転灯は、Assistant Starter が2分前に点灯し、発艇後に消灯する。

使用レーンは Fairness Committee（Finish Tower にいる Mike Williams 財務役員が担当することが多い）が風向き等を考慮して Session 毎に決定する。その決定を聞いた Umpiring Committee（Finish Tower にいる Patrick 審判委員長が務めることが多い）は「6杯なら1～6レーン、5杯なら2～6レーン、4杯なら2～5レーンを使用する」という具合に審判各部署に無線連絡する。1日が午前・午後など複数の Session に分かれている場合、Session 毎に使用レーンが変わることがある。又、Session 内でも急に風向きが変わった場合などは変更になることがある。

発艇定刻が遅れる場合は、事前に新たな定刻を決定して周知する。（自分が判定部署で聞いた無線は、映像制作会社→Fairness Committee (Mike) →Umpiring Committee (Patrick) →TV Catamaran Driver の順だったが、多分、無線を聞いた発艇はクルーに対し Notice Board に新たな定刻を書き（又はマイクとメガホンで）新たな発艇定刻を伝えていたはずである。）



(写真) 発艇栈橋



(写真) 光発艇操作ボックス

(3) Judge at the Start（線審）（今回は担当せず）

今回は Starter による発艇合図信号に連動して画面がフリーズするシステムを使用した。

Aligner（通常は NTO が務める）は直接艇首を見るのではなくシステムのスクリーンを見て艇を揃える。ボートホルダーへのトランシーバーによる指示は現地語で行う。艇の長さに応じて前後させるスタートフィンガーは（戸田のようにウインチを使ってではなく）足の裏（踵）で軽く蹴るようにして前後させていた（欧州で一般的なタイプ）。

Judge at the Start は艇首が揃ったと判断したら操作ボックスの白ボタンを押す。その結果、発艇手元の操作ボックスに組み込まれている白ランプが点灯する。これが線審旗の代わりなので主審には線審旗が上がっていることが伝わらないことになる。

発艇直後、Judge at the Start はフリーズしたスクリーンを見てフォルススタートを瞬時に判断する。フォルススタートの場合、目の前の操作ボックスのフォルススタートボタンを押す。その結果、発艇合図信号の赤ランプが点滅し、ブザー音が断続的に鳴る。（現在のルール 75 条ではこのシステムを使用している場合は線審がフォルススタートボタンを押しても良いことになっている。）

Aligner ではないもう 1 名の NTO は、計時のバックアップの為、判定とのホットライン（有線電話のようなもの）で「Attention→Go」を音声で伝える。また問題なく発艇した場合、画面のフリーズを解除する。



(写真) 発艇台から線審小屋



(写真) 線審の操作ボックス

(4) Umpire (主審) (第 1 日午後、第 2 日午後)

今回は主審を 2 度務めた。Final A を担当したときは Dynamic Umpiring (通常の追行方式)、それ以外は Zonal Umpiring (位置固定方式) で、その両方を経験できた。

Zonal では担当地点 (Umpire-1 から Umpire-6 まで順に 100・450・800・1150・1500・1850m) のコース外 (今回は回漕レーンの反対側である 7 レーン (又はその外側) で) で横向きに待機し、レース艇が全て通り過ぎた後でコース中央まで移動した後、Finish 方向に 90 度向きを変え、レースを見守る。次の担当地点の審判艇がコース外から移動を始めたら、自分は 90 度向きを変え、コース外に移動する。接触・妨害の恐れやクルーへの危険がある場合は、その地点に審判艇を進めても良いことになっているが、実際にはそのような事態に至らないことが殆どである。従いクルーが隣のレーンに入りそうになった場合などは遠く離れた地点から警告を行うこともあり、ハンドマイクによる声が届かないことが度々発生する。(ハンドマイクも日本で使うものより出力の低いもの (5~10w 程度のもの) が多く、益々不満が残る。)

第 2 日午後は Zonal で 2 レースの後、残る 6 レースは Final A だったので Dynamic Umpiring であった。自分は Umpire-4 だったので、Zonal を 1150m で行い、Final A が始まってからは 800→450→100→追行→1500→1150 とポジションを変えた。

Final A では審判艇の内、1 艇を「Admiral=提督」に定める。Admiral の役割は Finish Line を過ぎた辺りで待機し、Finish 後のクルーに 1~3 位を伝え、Victory Ceremony に速やかに向かうよう指示をすることである。今回は、最初の Final A を担当する Umpire-1 が自分が担当するレースの後、そのまま Finish 水域で待機するようなフォーメーションが採られた。1~3 位のクルー名は Responsible Judge at the Finish が Umpiring Committee (通常は Patrick) に Finish Tower 内で口頭で伝え、それを Umpiring Committee が無線で Admiral に伝える。

Para の PR1 (最も障害が重いクラス) W1X の Final A で最下位のクルーが 13 分台で Finish した為、15 分後の次のレース (PR1 MIX の Final A) の発艇定刻を 2 分遅らせた。それでも TV Catamaran

(TV カメラを搭載したカタマラン) が発艇方向に全速力で戻る為に「全審判艇は7レーンを空けるように」との無線が Driver→Umpiring Committee→審判各部署の順に入った。



(写真) カタマラン 8 台



(写真) 旗立てパイプあり



(写真) ハンガリー製

(5) Judge at the Finish (判定) (第3日全日)

1つの業務は、各クルーが Finish する度にバウナンバーを「2!」「4!」のように叫ぶことである。ブザーは NTO が Finish と同時に鳴らすが、ブザー音と同時にではなく、その直後に叫ぶ。この通過順は NTO の 1 名がテンキーに入力する。テンキー入力された目視の確認結果は、Photo Finish 1 (=Official Result)、Photo Finish 2 (=Back up 1) に次ぐ「Back up 2」として扱われる。(競って Finish した際に 3-2 の順番であるにも拘らず「2!、3!」と言ってしまった時があったが、計時システム (Result System) を担当している Swiss Timing 社のオペレーターが即座に「3!、2!」と言い直してくれた。Back up 2 とは言え、正確性を期さなければと反省した。)

もう 1つの業務は、主審がレース成立の白旗を上げた後に「White Flag!」と叫ぶと同時に白ランプを点灯させることである。(僅差で複数のクルーが雪崩れ込んできたレースの時等、この業務を忘れてしまい、他の方 (Patrick 審判委員長等) から「White Flag!」と促され、慌てて対応することがあった。Swiss Timing のオペレーターは White Flag! の声を聞いて Photo Finish Camera に基づく Result Sheet の作成に着手する為、タイムリーに行わなければならないと反省した。)



(写真) 左には Swiss Timing



(写真) 台上から



(写真) 右には FISA 役員

(6) Responsible Judge at the Finish (判定) (今回は担当せず)

Judge at the Finish が決勝戦の延長線上に座って Finish の瞬間を目視するのに対し、Responsible Judge at the Finish は Photo Finish Camera の映像が映し出されるスクリーンの前に座る。レースの状況を直接見ることができない場所に座ることが殆どである。

レース成立後に Swiss Timing のオペレーターが目にも止まらぬ早業で、バウボールにカーソルを合わせ、レーンを特定し、Result Sheet の形式で印刷して手渡してくれる。Responsible Judge at the Finish の業務は、その内容を確認し、問題がなければ「Race<番号>, Official!」と叫び、署名することである。

これを合図に Swiss Timing が Result System の確定ボタンを押し、会場内の Score Board 及び FISA Website で順位と Finish Time が公表される。(Website ではその直前まで「Unofficial」の文字が表示されている。) 12:11~12:36 発艇の Final B の 6 レースで全艇 Finish から Result System で Official になるまでは 2 分から 2 分 50 秒であった。

因みに 500m、1000m、1500m の中間計時は、2017 年から GPS=Official Result、Photo Finish=Back up とのことである。会場内の Score Board も FISA Website 上の記録も中間計時タイムが瞬時に表示されるのはこの為である。

(7) Control Commission - Out Pontoon (出艇監視) (第 2 日午前後半)

第 2 日午前の Athlete Weighing が 07~11 時頃で終了した為、その後、13 時頃まで Control Commission Out Pontoon を手伝った。

ボランティア 4~5 名は Bow Number 及び GPS の取り付けを行う。Out Pontoon にアプローチしてくるクルーを遠目でユニフォーム等により判別し、Start List を見て該当する Bow Number と GPS を Swiss Timing テントから持ち出す。歩いてくるクルーが Out Pontoon に乗る前に呼び止め、クルーの名前を呼んで再確認した上で Bow Number と GPS を瞬時に取り付ける。World Cup の場合、同種目に同じ国から複数出漕することが多い為、「GER 1 or 2?」という風に確認する必要がある。

ITO 2 名と NTO 2 名は協力して Athlete (Photo Book 及び Accreditation Card)、Advertisement (Athlete 及び Boat)、Bow Balls、Quick release foot stretchers (特に Heel Rope)、Identifications、Communication and Electronics、Cox Dead Weight) の確認を行う。

以上を順を追って記載すると「ボランティアがクルーを呼び止める→クルーが艇を担いだまま立ち止まる→ボランティアが Bow Number・GPS を取り付ける→ITO/NTO が各種確認作業を行う→ITO が行って良いと伝える→クルーが Out Pontoon に向かう」ということになる。

今回の会場は Out Pontoon に 2 方向からアプローチするレイアウトであった為、あるクルーに関与している間に反対方向から次のクルーが Out Pontoon に上陸してしまうことがあったが、すぐに呼び止めて事なきを得た。

ボランティアによるクルー特定の後、別のボランティアがクルー名を質問することがあった。ボランティアがクルーを特定した直後に他のボランティアと情報共有する工夫をすれば防げる事態であると考えた。

Heel Rope が長過ぎるケース、Single quick hand action で足の甲側のマジックテープが取れないケース等では、その場で改善するよう伝えコーチが数秒間で調整する場面が多く見られた。

Final A では大会支給の T シャツの着用も確認項目の 1 つであった。

W8+の Test Race に出漕する CHN-1 が Dead Weight 2.4kg として金属のプレート数枚を粘着テープでぐるぐる巻きにした上で 3 番漕手のシート下に粘着テープで固定していた。ITO として

「Dead Weight は Cox に最も近い場所に置くこと」と指摘し、Cox とコーチが慌てて対応した。問題ないことを確認し、出艇して良い旨を伝えた。



(写真) GPS 架台取り付け



(写真) GPS

(8) Control Commission - In Pontoon (帰艇監視) (第 1 日午前)

第 1 日の午前は今大会で一番長いセッションで 53 レースあった。

In Pontoon では艇計量対象クルーへの指示、デッドウェイトの確認、帰艇したクルーの記録が主な任務であるが、艇や服装の広告違反があれば次回以降正すようクルーに注意するようにしている。今回は PR1 の補助ポンツーン（自転車の補助輪のようなもの）への違反表示、バウ周辺の違反表示（メーカー名の文字表示）に気付きクルーに注意した。（イエローカードは与えず。）



（写真）補助ポンツーンの表示違反 （写真）バウ部分の表示違反

艇計量対象クルーへの指示は ITO 自らが行う。（クルーへの指示前に NTO/ボランティアには伝えない。）伝えるのは艇を担いだクルーがポンツーンから陸上に渡るタイミングである。パラ種目の場合、選手が車椅子で移動し、コーチ・関係者が艇を担ぐことがあるが、伝えるタイミングは同じである。PR1 の補助ポンツーンを外した後に艇計量を指示した場合は、補助ポンツーンを取り付けた上で艇計量所に来るように伝える。

艇計量対象クルーは NTO に誘導してもらうが、遠くにいる NTO を呼ぶ為に業務開始時に呼び名を聞き、覚えるようにしている。今回は Ms. Neviana と Mr. Marko であった。

フィニッシュ後のクルーにコーチが飲料ボトルを渡す場所は指定されているが、In Pontoon で飲料や Cool Vest を渡すコーチが複数いた為、今後は指定された場所で手渡すよう厳重注意した。また出艇直後に In Pontoon に立ち寄り、短時間で修理して再出艇したクルーがいた。

FISA Media チームがレース直後のクルーに In Pontoon の中央部分でインタビューをしていたが、揚艇する他のクルーの邪魔になっていたので協力を求めた。



（写真）帰着直前

（写真）帰着直後

（写真）水の受け渡し

(9) Control Commission - Athlete Weighing（選手計量）（第2日午前前半）

第2日午前47レースの内、15レースが軽量級種目だったので漕手計量を高い頻度で経験できた。舵手計量が始まる前に午後の ITO と交代した為、舵手計量は経験できなかった。

Athlete Weighing は軽量級の漕手計量と舵手付き種目の舵手計量を ITO 1名と NTO 1名で行う。（ITO 人数が少ない大会では ITO が他部署（艇計量等）と兼務することもある。）

計量室（Official Weighing）に Photo Book 1冊と本計量器（Official Scale、ディスプレイとプリンター付き）2台を、待合室（Waiting Area）に予備計量器（Test Scale、ディスプレイ付き）1台を準備する。業務開始前に 20kg の標準おもりを使用して計量器の正確性を確認する。

軽量級漕手は2時間前ちょうどに計量所に来るクルーが殆どであり、今回一番遅いクルーはその13分後であった。

ペアを組んだ NTO は AUT の元 ITO で、NTO になってからは Athlete Weighing を担当することが多いとのこと非常に手際が良く、ITO としては問題がないかを横で見ているだけで済んだ。言葉を交わすのは選手がクルー名を言うのと、NTO が計測後に「OK!」と言うくらいである。選手がルール・要領を理解している前提なので余計な会話は行わない。（軽量級漕手が帽子を被ったまま計量器に乗ったが、十分軽かったので選手には何も言わなかった。）



(写真) 選手計量所



(写真) 机上の様子



(写真) 控室と予備計量

(10) Control Commission - Boat Weighing (艇計量) (今回は担当せず)

今回の艇計量所は、In Pontoon から 20m 程の距離にある屋外の仮設テント内に設置された。計量器は Mettler Toledo 社製のものであり、計量器（プラットフォーム）前後 2 台がケーブルとジャンクションボックスによりディスプレイとプリンターに接続されていた。計量器にはめ込まれているウマ（艇置台）はエイトからシングルスカルまで同じものを使用する。クルーは計量所に入ってから艇を返して（リガーを上にして）ウマに置き、外すべきものを外したりキャップを開けてハッチ内を確認してもらったりする。その後、クルーは艇から離れ（手を放し）重量を確定させる。シングルスカルの場合、ウマの上で艇が安定しなければ艇を再度返し（リガーを下にして艇を伏せ）重量を確定させる。

6. 審判以外の競技運営

(1) 日程変更

最終日は 13 時頃から落雷が見込まれた為、前日 18 時頃に以下の通りレースを入れ替えることを決定した。

<変更前> 09:30~10:20 : Final B、10:35~13:48 : Final A (Final A は 15 分間隔)

<変更後> 09:00~11:36 : Final A、11:41~12:31 : Final B (Final A は 12 分間隔)

最終レースが終わった直後の 12:40 に「その後のクールダウンは禁止とし、全艇揚陸すること」という緊急アナウンスが行われた。実際に 13 時頃から雷が鳴り出した。この決定にはセルビアの気象予報士の天気予報が用いられていた。前日 17 時過ぎ (TMM 終了後) に FISA オフィスで FISA 首脳と気象予報士 2 名の綿密な打ち合わせが行われていた。

(2) 表彰式

表彰式がある Final A のレース間隔は、元々 15 分で組まれていたが、上記(1)のレース順の入れ替えに伴い 12 分に変更された。表彰式は次のレースが終了した直後に開始し、概ね 3 分間で終了していたので、レースが 7 分間程度に収まれば何とか回っていた。しかし 8+は選手数 (=メダル授与数) が多く、表彰式に 5 分間程度かかり、更に M8+の表彰式直前の W1X が 7 分 30 秒程度かかった (Final A としては最長) ことから、最後の 2 レース (M1X、W8+) は発艇定刻を 2 分遅らせることになった。

	M4X	M8+	W1X	M1X	W8+
レース		11:00～11:05			
表彰式	11:07～11:10				
レース			11:12～11:19		
表彰式		11:20～11:25			
レース				11:26～11:32 (11:24 から変更)	
表彰式			11:34～11:37		
レース					11:38～11:44 (11:36 から変更)
表彰式				11:45～11:48	
表彰式					11:54～11:59

(3) 航行ルール

Cool Down は（戸田コースのように）レースが行き過ぎてからレースのレーンにはみ出して行うようなルールになっておりマーシャルが見張っていないと危険であった。

(4) Sport Presentation

第2日午前の Control Commission Out Pontoon の業務が 13:00 頃に終了した為、Sport Presentation を見学した。フィニッシュタワーは、5 階に Sport Presentation、4 階に Photo Finish Camera、3 階に審判と Swiss Timing、2 階にグラフィックスのコントロール室、1 階に Sport Presentation の機材、となっていた。

Finish Tower にいる Tower Announcer は英語 1 名（Mr. Peter O'Hanlon）とセルビア語 1 名。この他に Commentator Car でレースを追行しながら実況を行う Commentator が 4 名（英語 2 名とセルビア語 2 名が 2 台の車両に分乗）いる。

Tower の現地アナウンサーには原稿がなく、Peter の英語を聞いて即興で喋っているように見えた。順位の確認等で時々 Peter とアイコンタクトを取っていた。

見学をした時はレース間隔が 6 分間だったが、概ね以下のような流れであった。

- ・ Tower Announcer : 1800m 付近から実況→Finish 後も 1 分 40 秒程度はそのレースのコメント→画面を次のレースに切り替えて実況（500m 辺りから）→そこから 60 秒程度（800m 辺りまで）実況し Commentator にバトンタッチ

- ・ Commentator : 800m 辺りから 1800m 辺りまで実況し、Tower Announcer にバトンタッチ

7. その他の情報

- (1) 人員輸送：チーム（選手、コーチ等）、FISA、ITO、業務委託者等は、現地 OC が空港⇄ホテル、ホテル⇄会場の送迎を手配。
- (2) 食事：朝・夕はホテル、昼は会場又はホテルの選択制。昼食は前日 13 時までに会場で申請。
- (3) 競技艇運搬：欧州開催の為、全ての国がトレーラー搬送。コンテナ搬送なし。
- (4) 競技備品：自動発艇装置使わず。
- (5) 水上バナー広告：GPS Performance SA 社の 4 人が設置、メンテ、撤去。
- (6) 選手対応：インフォメーション、荷物預かり、休憩所、更衣室、シャワー、トイレ、陸上練習、医療体制、等が完備していた。
- (7) テント類：多くの国が自前テントを持参。

- (8) 観客：全て無料席。
- (9) 競技会場ゾーニング：アクレディテーションエリアと Finish Tower のみ制限あり。
- (10) 警備：通常の公園の警備に加え、OC 要請の警察、OC 契約の警備会社等。
- (11) 売店：公園内の為、地元の既存売店多数、その他は FISA 公式ショップ等。
- (12) 気象予報：セルビア気象協会の 2 名が常駐。（落雷予報で的確に対応していた。）

以 上

<審判員リスト> 事前に PoJ からメールで送られてきたもの

World Rowing Cup I, Belgrade - Jury



David, AUS



Karin, AUT



Chunxin, CHN



Goran, CRO



Kasper, DEN



Rasha, EGY



Nicolas, FRA



Domenico, ITA



Daisuke, JPN



Inga, LTU



Laurens, NED



Sergio, PER



Przemyslaw, POL



Rodica, ROU



Borut, SLO



Maximilian, SUI



Per, SWE



Halil, TUR

<集合写真>

